

三省堂中学国語教育

ことばの学び

No.12

虹色のエッセイ号

言葉に学び、 言葉で生きる

俵 万智 「流行の背景を考える」

長谷川 權 「恋と愛」

戸森 しるこ 「些細なひとこと」

宮下 奈都 「言葉が羽ばたく」

御徒町 凧 「モヤモヤした時間」

小川 洋子 「言葉の届かない場所」



流行の背景を考える

俵 万智



たわら まち

歌人。歌集に『サラダ記念日』（現代歌人協会賞受賞・河出書房新社）『ブーさんの鼻』（若山牧水賞）『オレがマリオ』（ともに文藝春秋）、絵本に『富士山うたごよみ』『かえるの竹取物語』（ともに福音館書店）など。近著に『牧水の恋』（文藝春秋）。三省堂『現代の国語』編集委員。令和3年度版『現代の国語2』に「短歌の世界」が掲載されている。



古 ぐからある言葉や表現が、ふいに周囲で流行するという現象がある。ここ数年、私を感じるの「○○のテイで」という言い方だ。主にテレビの収録現場で、頻繁に聞く。

「音は撮っていませんので、まあ、景色を楽しんでいるテイで、お二人並んで歩いてきてください」

「ここは、すみませんが初対面のテイで、お願いします」

といった具合だ。漢字で書くと「体」または「態」。実際にはそうではないかもしれないけれど、とりあえずこの場では、そうであるふうを装って……という意味合いである。

流行というのは、仕掛け人がいる場合もあるが、ほんとうに流行するには、多くの人が「これは使い勝手がいい!」と感ずることが必要だ。ファッションでも、爆発的に流行るものは「ラクダ」とか「時代の気分ぴったり」とか、やはり個人個人の共感があつてこそ、輪が広がる。

では、テレビの撮影界限で「テイ」が流行している理由は、なんだろうか。誰かが使ったとき「お、それ、いいな!」と感じた人がいたはずだ。そして徐々に広がり、ある時点で、非常にポピュラーな使い勝手のいい表現として定着したのだろうか。

ここからは、私の推測だが、テイというのは、とてもまろやかで、日本人の「婉曲表現好き」にぴったりだったのだと思う。加えて、テレビの撮影現場では、いろいろ現実とは違うフリをしなくてはならないことが多いという事情もあるだろう。

「初対面のフリをしてください」と「初対面のテイで」。どちらも言っていることは、ほぼ同じだが、テイのほうが罪悪感が薄くないだろうか。

身の回りで流行りはじめた言葉や表現があったら、ぜひチェックしてみたい。その言葉の特徴や、背景にある人の心の動きは、何なのかと。それは、生きた言葉の勉強だ。

恋と愛

長谷川 權



はせがわ かい

俳人。朝日俳壇選者。神奈川近代文学館副館長。『俳句の宇宙』でサントリー学芸賞、句集『虚空』で読売文学賞。現在、読売新聞に詩歌コラム「四季」を毎日連載、『図書』（岩波書店）に「隣は何をする人ぞ」を連載している。令和3年度版『現代の国語3』に「間の文化」が掲載されている。

恋

すてふわが名はまだき立ちにけり
人しれずこそ思ひそめしか

現代語に直すと、あなたに恋をしているという噂がもう広まってしまった。人に知られないよう、ひそかに思いはじめたのに。

「百人一首」にも選ばれた壬生忠見の歌です。この歌にかぎらず、日本人は昔から数多くの恋の歌を詠んできました。『伊勢物語』や『源氏物語』など恋の文字もいくつもありません。それなのに愛を詠んだ和歌は、おそらく一首もありません。

恋と愛。隣り同士の言葉なのに、なぜそうなのか。それは昔の日本人が愛を知らなかったからです。いいかえると日本にはもともと愛がなかった。

その理由は漢字の読みに隠れています。恋の訓は「こい」、音は「レン」です。一方、愛は訓も「あい」、音も「アイ」と思っていますか。「アイ」は音で訓ではありません。愛に

は音しかないので。

これは何を意味しているのか。日本語にはもともと文字がありませんでした。四世紀以前に中国から漢字が伝来しますが、このとき漢字についてきた中国語の発音が音です。

一方、中国から伝来した漢字のいくつかに、は当時、日本人が話していた大和言葉を読みとして与えました。これが訓です。

恋という漢字に「こい」という訓があるのは、漢字の伝来以前から日本には「こい」という言葉があり、日本人が「こい」に慣れ親しんでいた証拠です。

これに対して愛という漢字に訓がないのは、当時の日本には愛と呼ぶべきものがまだなかったからです。

人類愛、家族愛、愛国、愛社など愛を使った言葉はいくつもありますが、みな堅苦しく、よそよそしい感じがするのは、千七百年以上たっても日本人がまだ愛に慣れていないからかもしれません。



些細なひとこと

戸森 しろこ

ともりしろこ

児童文学作家。埼玉県生まれ。『ぼくたちのリアル』で講談社児童文学新人賞を受賞しデビュー。他に『十一月のマーブル』『理科準備室のヴィーナス』など。『ゆかいな床井くん』で野間児童文芸賞受賞。(すべて講談社。)

令和3年度版『現代の国語2』に「セミロングホームルーム」が掲載されている。



イラスト／佐藤真紀子

★中
学二年生の時に、宿題で書いた作文が選ばれて文集に掲載されたことがある。

当時所属していた吹奏楽部での、夏のコンクールに向けてのあれこれを書いた作文だった。国語の先生がわたしの作文を選んでくださって、「部活モノの中でダントツによかった」と、ほめてくださった。

その作文が、その後のわたしの進路に影響を与えることになる。

その文集が配られてしばらくしたころ、廊下ですれ違った同じ学年の社会科の先生に、「あなたの作文を読みました」と、突然声をかけられたのだ。

とても驚いた。ほとんど喋ったことのない先生だったから。わたしのことをなぜ知っているのだろうか、驚いたくらいだった。

「いい文章だった。なかなかあんなふうには書けないと思う」

興奮気味に、そう仰った。

その出来事が、後々までも印象に残った。ほとんど接点のなかった大人に、わたしの文章が、わたしの気持ちが届いたことに、わたしは感動したのだと思う。

おそらく先生にとっては、数多くの生徒にかけた、数多くの言葉のうちの、ほん小さなひとつだったのではないかと思う。でも、わたしにとってはそうではなくて、進むべき方向が定められた瞬間だった気がする。

たとえあの出来事がなかったとしても、わたしはきっと作家を目指していただろうとは思う。でも、いくつかあるきっかけのうちのひとつであることに間違いはなく、ひよつとしたら、なくてはならないものだったかもしれない。

年齢を考えて、おそらくその先生はもう退職されているのではないかと思う。だから、わたしがとても感謝していることを、かわりに他の先生たちに伝えたいと思った。

そんなふうに、些細なひとことが生徒を導いてくれるようなことが、学校ではよくある。



言葉が羽ばたく

宮下 奈都



撮影／堀田芳香

みやした なつ

作家。2016年『羊と鋼の森』（文藝春秋）で本屋大賞を受賞。他の著書に『スコーレNo.4』（光文社）、『誰かが足りない』（双葉社）など。最新刊は『とりあえずウミガメのスープを仕込もう。』（扶桑社）。福井市在住。令和3年度版『現代の国語3』に「私の読書体験 谷間の君へ」が掲載されている。



筆啓上賞という地元の町が主催する賞がある。年ごとのテーマに沿って四十

字以内で誰かに手紙を書く。その手紙が作品になる。全国から何万通も応募作が寄せられるこの賞の選考委員を、私は数年前から務めている。書いてみるとわかるのだけれど、四十字で手紙を書くというのがまず難しい。たったひとりの誰かに宛てた手紙でありながら、多くの誰かにも何かを届けなくてはならない。

読んで選考する側も真剣だ。短いからこそ、ひとつひとつの言葉に耳を澄ませる。そのままの言葉を受けとめ、さらに奥に何が隠されているのかを読み取るうとする。すると、短い手紙に込められた物語がふわりと浮かび上がってくるのだ。

手書きの文字は雄弁だ。若い人も、お年寄りも、うんと幼い子供も、自分の文字で手紙を綴る。これが、とてもいい。文字には力がある。何度も推敲されたであろう文章を丁寧に清書したのもあれば、殴り書きのように

用紙を埋めたものもある。美しい文字も、尖った文字も、弱々しい文字もあって、言葉より先に内容を物語る。手書きの文字が手紙を私たちづくっているのだとあらためて思う。

受賞作が発表される際、地元の中学校の生徒が受賞作を朗読する。これがまたいい。文字で呼び起こされた物語が、声によって息を吹き込まれる。今年、ある受賞作が読まれて、鳥肌が立った。中学生の書いた作品だった。選考時には、荒削りであることが少し惜しまれていた。それが、中学生によって読まれた瞬間に、言葉が立ち上がり、こちらに体当たりをしてきたように感じたのだった。

手紙というものが本来は言葉だけで伝えられるものであるならば、人の前で、生の声で読まれるこの発表会は、もしかしたら、本来の役割をちよつと越境しているのかもしれない。それでも、言葉が羽ばたくのを見るのは壮観だ。文字は浮力になり、声が追い風となつて、誰かから誰かへ、鮮やかなイメージを伴つて。

モヤモヤした時間

御徒町風



撮影／佐内正史

おかちまちかいと

詩人。1977年東京生まれ。歌手・森山直太郎の楽曲共作者として、ほぼ全ての作品の作詞を手がける。最近の著書としては、写真家・佐内正史との共著『Summer of the DEAD』（2018年）や詩集『雑草・他』（2019年）などがある。令和3年度版『現代の国語3』に「さくら（独唱）」が掲載されている。

★考
 えてる時って英語と日本語どっちで考えるの？」生粋のバイリンガルの友達に尋ねたことがある。彼女はしばしの沈黙の後こう答えた。
 「考えてる時って、どっちの言語でもないかも」「へー、じゃあ？」と、更に尋ねると。
 「状況によって英語だったり、日本語になって出てくる。大本は一つで、そこからパイプが枝分かれしてるみたいなの」
 卓球からの帰り道。十五年以上前の車中で
 のささやかなやりとりだ。
 しばらく経って、それに似た感じを覚えた
 ことがあって、それは敬語を使う時に似ているのかもしれないと思った。例えば目上の人と接していて、頭の中で会話を組み立てている時、その中に敬語的なニュアンスは含まれていない。で、声音になる時に、状況に合わせて自然と文法としての敬語が付加される（だから、友達と目上の人と三人で話している時に、視界に入ってくる友達につられて、目上の人のタメ口を使っちゃったりする人をしばしば見かける（あの気まずさ、けっこう好き！））。
 自分は詩人を名乗っていて、それ故、いつ

も詩のことを考えているのだけど、冒頭の友達から聞いた話は、創作時にいつも直面する問題でもある。一般的に詩は、言葉のメディアだから、言葉の問題を扱っているようだけれど、その実、詩作に於いて重要なのは言葉とは無縁な言語化以前のモヤモヤした時間であって、言葉はあくまでそのモヤモヤしたものを具象化するための道具に近い（当然、千差万別ではあるだろうけれど）。もし自分に並外れた音感や空間認識能力が備わっていたなら、チェリストか椅子職人にでもなっていたのかもしれないと思わずにはいられなくて、たまたま一番慣れ親しんでいた「言葉」がアウトプットに選ばれているという格好なのだ。
 こないだ知り合いと飲んでいて、会話の中で「的を得る」と言ったら「御徒町さん、「的を得る」は誤用で「的を射る」が正しいんですよ」と指摘された（諸説あるらしいが）。そして彼は「詩人なんだから、お願いしますよー」と笑っていたのだけれど、何をお願いされたのか一向にわからないままお会計を済ませて、それぞれ帰路に着いた。

言葉の届かない場所

小川 洋子

おがわ ようこ

作家。岡山県生まれ。1988年「揚羽蝶が壊れる時」で海燕新人賞を受賞。他の著書に『密やかな結晶』（講談社）、『博士の愛した数式』（新潮社）、『ことり』（朝日新聞出版）など。最新刊は『小箱』（朝日新聞出版）と『約束された移動』（河出書房新社）。令和3年度版『現代の国語2』に「私の読書体験 生涯の友と出会う」が掲載されている。

宮

沢賢治の童話を読んでいると、音もなく風が吹き抜け、空気の成分が変化するような一瞬に出会い、つい立ち止まってしまふことがある。例えば『なめこ山の熊』のラスト、熊に殺された猟師の小十郎を、熊たちが悼む場面。そこではなぜか熊という言葉は使われていない。黒い大きなものが環わになって、死者に祈りを捧たもげている。どうしてだろう、と不思議に感じながら、その思いはすぐに、どこか遠い山奥に満ちる圧倒的な祈りの気配に飲み込まれてゆく。

文化人類学者で批評家の今福龍太さんは、『宮沢賢治 デクノポーの叢知えいし』（新潮選書）の中で、このシーンについて魅力的な解釈をしている。猟師と動物の対立が消え、熊はそう名付けられる以前の、前ま言語的な存在に還かえり、そこに小十郎の魂が加わった……というのだ。長年の謎に光が射したようだった。賢治は、言葉によって物事が定められる以前の世界を描こうとしていたのだから、私が不思議

議を感じるのも当然なのだ、と思えた。

もしかしたらどんな作家にも、言葉以前の世界を見通す視線が必要なのかもしれない。本物の感動を与えてくれる本の前で、人はしばしば言葉を失う。なぜ自分が感動しているのか、理由を説明できず、それでも満足して沈黙に浸っている。

言葉を使って、言葉が到達できない奥深い場所まで読者を運ぶのが、文学の役目だとすれば、小説を書くのは何と厄介なことだろう。気が遠くなりながら、それでも言葉から自由になった世界へ足を踏み入れたいという思いは強い。熊でもなく、小十郎でもなく、ただ自然の流れの一部分を共有するもの同士として、同じ魂を見つめる。同じ静けさを分け合う。本のページをめくるだけで、死の真実に触れられる。

ああ、やはり宮沢賢治は偉大だ。自分も賢治のように書けたらいいのにと願いつつ、いまだ言葉の混沌こんとんにまみれた沼でもがいている。



対話して行動する チームのつくり方

楽しみながら身につく話し合いの技法

橋本 淳司



対話をととしてアイデアを生み出し、アクションを起こす「未来アクション部」の生徒たちの奮闘と成長を描く。「主体的・対話的で深い学び」の進め方を、スキルを図解しながら物語仕立てでやさしく解説する。

A5判 128ページ
本体1,800円+税 ISBN 978-4-385-36516-9

フィンランド×日本の 教育はどこへ向かうのか

明日の教育への道しるべ

北川 達夫・高木 展郎



3年にわたる訪問をととして見えてきたフィンランドの教育を、先行事例として参照することにより、日本の教育が進むべき方向を考察する。フィンランドの教育の「本当」が、「明日」の日本の教育を照らし出す。

A5判 208ページ
本体2,300円+税 ISBN 978-4-385-36586-2

令和3年度版 中学校国語・書写教科書 ウェブサイトのご案内

- 令和3年度版『現代の国語』・『現代の書写』の特徴
- 内容解説資料・教科書ダイジェスト
- 各種資料
(年間学習指導計画作成資料・評価規準一覧 他)

随時更新予定

三省堂 国語教科書

<https://tb.sanseido-publ.co.jp/03gkpr/>
<https://tb.sanseido-publ.co.jp/03gspr/>



■ 著者からのメッセージ動画



又吉直樹先生



夏井いつき先生

株式会社三省堂

「教科書・教材サイト」 <https://tb.sanseido.co.jp/>

〒101-8371 東京都千代田区神田三崎町2-22-14.....03-3230-9411(編集)・9412(営業)

- 大阪支社 〒530-0002 大阪市北区曾根崎新地2-5-306-6341-2177
- 名古屋支社 〒460-0002 名古屋市中区丸の内3-21-31 協和丸の内ビル2F052-953-9211
- 九州支社 〒810-0012 福岡市中央区白金1-3-1092-531-1531
- 札幌営業所 〒060-0042 札幌市中央区大通西15-2-1 ラスコム15ビル3F011-616-8722